


C A P T O R

DM EDITION

FOR ADULT ONLY

MECHI

今日は、昼から雑誌のインタビューと撮影が予定されていた。

来月オンエアされる僕主演の新ドラマのPRを兼ねて、3回の着替えを挟んでハイブランド専門の一^フ流ファンション誌「FAME」で組まれた特集は、あるブランドとコラボした「僕の最新モードスタイル」。20ページが予定されている次号の目玉企画で、もちろん僕が表紙を飾る。

映画にしろドラマにしろ、よくあるプロモーションの一つで断る選択肢はない。

気乗りのしない腹を抱えてスタジオに向かうのも慣れしたもので、バーモンジーのスタジオに着くとマネージャーのクレアが開口一番、「おはよう、今日も完全に顔がいい、最高にセクシーね」とグランデサイズのカップをくれた。

Coffee NEROのアメリカンは、ダメな日のとつときの慰めだ。「わかつてる」

関係者達を素通りして控室代わりのマイクルームに

行き、コーヒーで目を覚ましながらクレアからスケジュールと概要を聞いた。

1時間のロングインタビューの後、3回の着替えを挟んで夜までたっぷり写真撮影が待っている。

インタビューの後に長めの休憩が取られているのも、普通なら用意されないケータリングが呼ばれてるのも、この類の撮影がとにかく嫌いな僕のためだろう。ところが、いつもならこんな日は僕に極力気を使うはずのクレアがやけにウキウキと「面白くなりそう」なんて言うから、へそを曲げてやりたくなった。

「何が? フォトの最後のコンセプトなんてクソくらえだよ、『ジエンダーレスを超える』ってナニ?」

ほぼカタログみたいな内容の資料をバラバラめくり、確認したアクセサリー やジュエリーはユニセックスを謳っているが、控えめに言つても女性ラインにしか見えない。合わせる服や小物を見ても、その装いはクイア好みに思えた。

「そういうこと、外では言わないで」